

【七段】に続き、死者の滋実と生者である自身との一対一の対峙がなされている。滋実の東北の地での無念の死と西府の太宰の地で謫居生活を余儀なくされ、生きる屍となりつつある自身を「泉壤」「泥沙」と対比させる。そして、かつて道真に語った滋実の言葉を想い起こす。そこには、「殺意二百韻」の中においても、「秋夜」の中でも繰り返して詠まれている「絶望的な孤独」の心情が、亡き友滋実に対して初めて心を開くかのように、自分の今の心情を語りかけようとするのは他ならぬ、「滋実」が「死者」（あの世の人間）であることに因る。つまり、この世での絶望がああ世での光であって欲しい切なる願いが込められているのではないか。

【九段】

原文

訓読

- | | | |
|----|-------|---------------|
| 65 | 惟魂而有靈 | 惟れ魂にして靈有らば |
| 66 | 莫忘舊知己 | 舊き知己を忘ること莫かれ |
| 67 | 唯要持本性 | 唯だ要ず本性を持して |
| 68 | 終無所傾倚 | 終に傾倚する所無からしめよ |
| 69 | 君瞰我凶慝 | 君 我が凶慝を瞰ば |
| 70 | 擊我如神鬼 | 我を撃つこと神鬼の如くせよ |
| 71 | 君察我無辜 | 君 我が辜無きを察せば |
| 72 | 爲我請冥理 | 我が爲に冥理に請へ |